教学試験発心教材① 立正安国論 問

法梅蓮の

平成29年度 教学部初級試験:青年部教学試験3級 題 対応版

て日重産6月子 一年/ 長見し 一日重産6月子 一年/ 1000年/1000年/1000年	こっていない難が記しることを警告するのである。 「参考資料/見代春尺 左左を国命(是汝所謂士)」 「「一」(『二)、「一」、「一」、「一」、「一」、「一」、「一」、「一」、「一」、「一」、「一」	まだ記
こ説かれる諸難の		
た。それゆえ、主人	の高曽などに宗教的権威の容認を得て、幅広く人々の信仰を集め、隆盛を誇ってい	さき
の信仰を宣揚す	張しているからである。だが、この「専修・・・」は、世俗の権力者の帰依を受けるばかりか、「「一」「一言名」を除りて、彩真を言いるよういる仏神と治言系を含ままれる。	うに主張し
こって一念仏が物	「三郎子」と余って、尺事と含めるあらずる女神に去匿者と含ってあると述べ、 災厄の元凶として の「専修 」を強く破折する。	: の 5
る「」こそ災	『こう) 「「「「「「「「「」」」」(「「」」) 「「「」」) 「「「」」) 「「」」) 「「」」) 「「」」) 「「」」) 「「」」 「「」」 「「」」 「「」」 「「」」 「「」」 「「」」 「「 」」 「「 」」 「 」」 「 「 」	
こていく。 おめく災糞を噴く	に対し	本 上 上
目 グ	は、 系	文 少
の法難・	毅然たる大聖人のお振る舞いに対し、諸宗の高僧は讒言によって幕府を動かし、 年	その
らをえる min	僧ら、あわせて※11カ所に書状を送り、公場対決を迫られた。〈※「十一通御書」〉[『年』に『『『『幸春』]『『『書杯』』『『『『古春』』『『『『『書杯』』『『『『『『『『『『『『『『『』』』』『『『『『	大寺の
【一】 つ兼介の者	司Fこよ、寺り纨蕉	を執筆さ
	年」、大聖人は、蒙古からの国書が到来したことをいち早く知り、2度目の諫暁の書とな	
が揺らぐことはなかった。	ように、命の危険にも度々さらされる迫害を受けられても、大聖人の「・・・・」の精神と行動・大聖人御自身も額に傷を負い、 左手を折られた [・・・・の法難]が起こる。	出たたと
同行の門下の中に死者が		しさらに
onた。	の法難 が起こり、翌· 年 (1261年)5月には、幕府によって に処された。	<u>5</u>
が大聖人の草庵	のであった。 の を強く破折する「 」の提出からほどなく、	
に、結果的に黙殺の態度	は大聖人の諫暁に対して、御書に「お尋ねも採用もなかった」(御書3355~通解)などと仰せのように、	幕 —
れる。		〕 日蓮
こているのである。	を中心者とする体制としての「国家」ではなく、民衆が生活を営む場である「」を指して	単に権
これた「安国」の「国」とは、	目的である「」とは、社会の繁栄と世界の平和にほかならない。日蓮大聖人が示され	
肝要である。	って人々の生命の根源的な迷いであるを打ち払い、を社会に確立することが	る対話によ
	す主義・思想であり、そうした「民衆蔑視」の教えは次第に人々の心に浸食し、活力を奪っていく。- 「。゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚	もたられ
えは、人間の伴の分断を	、「 ̄ ̄ ̄ とは、 ̄ ̄ ̄ ̄ ̄ でもある。 ̄ ̄ ̄ ̄ の万人成ム・万人平等の情申こ豆する教えは、 という根源の力を開いて できると説く の法理である。	が ま た、
すなわち、すべての人々	」とは「	
)質けぶつう「グルンロンイル゚・・・は、ペーーーーーーーート、「ーーーーーーーーーーーーーーーの側近である宿屋光則を介して、本抄を提出されたのであ	, L , [
て、「立正安国論」		が帰依する
たの教えに人々	゚ような民衆の苦悩を目の当たりにされた大聖人は、災難を止めて民衆を救う道を探求され、誤った ゚̄。〈※ 鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』→「現代語訳 立正安国論」115㍍参照〉	ている。
出たという※記録が残っ	入地震は前代に例を見ない被害をもたらした。山は崩れ、家屋は倒壊し、地が裂け、火炎が噴き出	\mathcal{O}
好の動機である。(御書33%- 通解)とあるよ	に、正嘉元年(1257年)8月に]一帯を襲った「の」が、本抄を執筆された直接の動「立正安国論奥書」に、「正嘉元年太歳丁巳八月二十三日戌亥の尅(午後9時前後)の大地震を見て考えた」(御書	うに、一
い糸って、八川	民衆は苦悩の底にあった。これからはない、これがあると、これがある。これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、	乱れ、日
手のようこ売き、人いま	当寺よ、大也鬘・大風・共水などり自然及唇が目欠ぎ、深刻な几堇と召き、加えて妄舞り布子などが毎年り示(北条一家・一族の統括者)の である。	宗(北条
入道と呼ばれていた、得	の鎌倉幕府の実質的な最高権力者は、重病を機に執権職を子・┃	当時時
	のを指摘して来妄を開き、圧しい道と導くとためと是出された「「大き」である。(2)のである。(4)のでは、日蓮大聖人が「大き」の最高権力者に対して、「「大き」の最高権力者に対して、「「大き」の表記を指す	手の呉の
、「 「 いさ)	は、「草に見しば「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		a !

教学試験発心教材② 立正安国論

法梅蓮の

問 題

平成29年度 教学部初級試験:青年部教学試験3級 対応版

次の文は、 「第41章」(31~1行目~6行目)の現代語訳の一部です。これについて、 あとの問いに答えなさい。

Ξ)	(<u></u>	(—)					問四	_ (四)	(三)	(=)	(—)	問三	「 第 42	問二	問一					
	[_ A]・ _ B]にあてはまる難をそれぞれ答えなさい。また、傍線ハはどちらの難かを答えなさい。		それだけでなく「	いう難である。 仁王経の七難のうち、六難は今盛んであるが、一難はまだ現れていない。すなわち、ト四方の外敵がやって来て国を侵すと	金光明経のうちの種々の災禍はそれぞれ起こっているが、ハ外部の敵対者が国内を侵略するという災難はまだ現れていない。	□二災はすでに出現し、一災がまだ起こっていない。すなわち、○ である。○ である。○ 本いわち○ 本いわち○ 本いわち○ 本いのである。大集経の三災のうち、	Ⅰ 次の現代語訳の文について、⑴~⊆の問いにそれぞれ答えなさい。	【「水中の月の波に動き 陳前の軍の剣に靡くがごとし」(3~9行目)	「麻畝の性と成る」(31~7行目)	【「蘭室の友に交りて」(31~7行目)	、「鳩化して鷹と為り 雀変じて蛤と為る」(3~7行目)	一 この章の初めの四つの譬えについて、それぞれ説明しなさい。	42 章」(31 ~7行目~ 18 行目)について、あとの問いに答えなさい。	一 傍線イについて、説明しなさい。	[]にあてはまる文を、御文で答えなさい。	世の中は羲農の時代のような平和な世となり、国は唐虞が治めるような安穏な国とな	すみやかに	るこれが原因で、 「これが原因で、 ┃		仏の教えはこのようにさまざまに分かれていて、その趣旨をすべて知ることは難しく、不審は多岐にわたって 何が正しい

傍線口=

の 災

C

の 災

教学試験発心教材③

法梅蓮の

教学部初級試験:青年部教学試験3級/立工安 国論》 三 問題 対応版

「**第46 章**」(32 ½ 13 行目 ~ 17 行目)の御文について、あとの問いに答えなさい。

無く土に破壊無んば身は是れ安全・心は是れ禅定ならん、 速に1実乗の一善に帰せよ、然れば則ち本三界は、皆仏国なり仏国其れ衰んや十方は悉く宝土なり宝土何ぞ壊れんや、 つて鎮に謗教の網に纒る、『此の朦霧の迷/彼の盛焰の底に沈む豈愁えざらんや豈苦まざらんや、 広く衆経を披きたるに専ら謗法を重んず、悲いかな皆正法の門を出でて深く【邪法の獄に入る、 此の詞此の言信ず可く崇む可し。 汝早く信仰の寸心を改めて 愚なるかな各悪教の綱に懸 国に衰微

教学試験発心教材④ / 佐渡御書

法梅蓮の

問題

平成29年度 教学部初級試験:青年部教学試験3級 対応版

教学試験発心教材⑤ 法華経 (前篇)

月間	○ 普賢菩薩勧発品 第二十八)後
会へと展開していくのである。	妙荘厳王本事品 第二十七
を払通して衆生を敗うのか、というテーマのもと説去の	陀羅尼品 第二十六 ()
悪世【	観世音菩薩普門品 第二十五
「三草二木の譬え」〈薬草喩品第五〉を用いて、 が示されている。	妙音菩薩品 第二十四
七譬』のうち、「三車火宅の譬え」〈譬喩品第三〉、「長者窮子の譬え」〈信解品第四〉、	-
たのための教え()へ導くための方便であることを、『法華経の	
聞・縁覚や菩薩の覚りを得るための三つの教え()は、法華経で明かされ	-
7===3の対の諸	
いて、のないでは、これでは、これをはないのでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	
であると説かれている。	法師功徳品 第十九
自身と等しい仏の境涯に到達させること【]こそ仏たちの	随喜功徳品 第十八
の境涯)を開かせ、それに基づく実践を行って、一切衆生をさせて、仏	分別功徳品 第十七 /
る道に入らせる」(法華経167~)――万民の生命に平等に具わる仏知見(仏の智慧	如来寿量品 第十六
タ 生に	/ 従地涌出品 第十五 会
『的にすべて 【 【 【 】 として平等であることが	(安楽行品 第十四
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	勧持品 第十三
のすみたかり、後書「いいの」と	提婆達多品 第十二
	見宝塔品 第十一
L 4 L 5 L 5 L 7 L	第十
とは であると、欠の卸文で明確こ明かされてハ	
ふまえて、「 」とは具体的には の衆生とその環境世界であり、	
覚知した「万物の真実のすがた」なのである。日蓮大聖人は、天台大師の注釈を	
「」は決して「」から離れてあるものではないというのが、仏が	
	受记品等人
・)・)がになっての三と「と」にいいいい。 ・)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
トンCO見象— SOCIETING TERROPES TO THE TERROPES T	第四
第二で説かれている『 』とは、「 」 現実世界	譬喩 品 第三
二〉と『』〈譬喩品第三~人記品第九〉の二つの法理が説法される。	第二
前 会 では、 の中心となる、 ¶ 』	/ 序品 第一
」で説法されたことから、『 』という。	法華経は、二度の「」と「
田先生は位置付けられて、『三種の法華経』と呼ばれている。	華経」、「時代の法華経」と戸田先生
したがって、	の根本法を示すものであると
大聖人後自身の 「「大聖人後自身の"	新草の
さこりつユーニー 一マーマン・アンドラン・アンドラン・アンドラン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン	スの通いださるだ。このであって呈えば、見事のであるだ。このであるだ。このであるだっていまっていまっていまっていまっていまっていまっていまっていまっていまっていま
の作り、どうかくには、大きを受けている。	かるが、一つののでは、
の也で、過去のムこうぎ兑いた去産圣ぎある。	が見ってゝ
	て「おまこん画す三こ一を叩えて」
	は国人の公共に共同にいってのには、大学を持ている。
本目的である、「人間の無限の尊厳	、それぞれの文化土窶の中で、法華経[『『』
は、法華経に対する注釈書を著して、諸経典の中で法華経が卓越していることを明――	中国の・日本の
』が優れた名訳として広く流布することとなる。	紀にが翻訳した『
を説いた経典である。やがて、『法華経』は中国で幾度となく漢語に翻訳され、5世	「」を実現する最も根本の教えを説いた経典である。
やがて幾世紀にわたり整理され、まとめ上げられる。『法華経』は、釈尊の本意である	釈尊の教えは、口伝えで伝承され、やが
呼ばれるようになったのである。	Ø)
尊)は、「」という根源的な苦悩を解決し得る、「胸中に具わる宇宙と生	仏教の創始者である (釈迦牟尼世尊)は、
]にあてはまる言葉を答えなさい。	『法華経』について述べた次の文中の
2年度 教学部初級試験·青年部教学試験3級 対応版 >	一法権 へ 平成 20
ピン 分垂糸(前篇) 『毘 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――	蓮 孝学 記懸子心孝林
/ 去車圣 (前篇) 写	一の女学式剣毛い女才

教学試験発心教材⑥ 法華経 (後篇)

法梅蓮の

教学部初級試験·青年部教学試験3級対応版入法 计单 经径(1後篇) 問題

『法華経』について述べた次の文中の にあてはまる言葉を答えなさい。

平成29年度

T三〜普賢菩薩勧発品第二十八〉	守護することを誓う。〈薬王菩薩本事品第二十三~
薬王・妙音・観世音・普賢などの菩薩たちや毘沙門天・十羅刹女ら諸天善神が法華経を受持する人々を	を広宣流布するように促し、薬王・妙音・観世
会の儀式』の幕が閉じる。釈尊滅後の	そうして、一切ののの儀式である『
、一切の諸菩薩・諸天善神に弘教を託すことになるのである。〈嘱累品第二十二〉	なのである。〈第二十一〉そして、
·も、すべて【 の 】であり、末法の御本仏· の直結の弟子	通り、広布の実践に励む私たち一人ひとり
久遠の たる事あに疑はんや」(御書1360~)と仰せのように、大聖人の御精神の	のにさだまりなばした
が一門となりとをし給うべし、と同意ならばののたらんか、	してのにてとをり、
なかんずく菩薩_なのである。さらに『諸法実相抄』で、「いかにも今度・信心をいた	大聖人御自身こそ【のの】、なか
、 を説き示し弘通されたのが である。この意義から、	この___の通り、末法の初めに出現し、
伝を弘めることを誓い、これを受けて釈尊から滅後の弘教をされる。	菩薩らは、仏の滅後に真実の大法を弘め
る。〈第二十〉	いうの思想が端的に示されている。
、万人の生命にはが内在しているゆえに、あらゆる人の生命をと	し)》(法華経567~)をもって説く。ここには、
か、敢て軽慢せず。所以は何ん、汝等は皆な菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べ	等皆行菩薩道 当得作仏(我れは深く汝等を敬い、
成仏したことを、『【 文字の 』《我深敬汝等 不敢軽慢 所以者何 汝	っても、忍耐強く、礼拝行を貫き通すことで成仏したことを、
】として、慢心の人々から杖で襲いかかれたり、石を投げられたりするなどの迫害にあ	自身も過去世に【
›素晴らしさを語る。〈 分別功徳品第十七~法師功徳品第十九 〉	釈尊滅後に法華経を受持し弘通する功徳の素晴らしさを語る。
<u>』</u> と明かす。〈 第十六 〉	の住むしてある『
衆生が身命を惜しまず仏道に励むなら、いつでも姿を示すと説き、世界]こそが永遠の仏	世界に常住しており、衆生が身命な
『する『 』を説き、入滅してもなお永遠の仏は、九界の凡夫たちが住む	永続している釈尊は、一旦は方便として入滅する『
Eは、仏界の生命が常住であり、永遠であることを示していく。菩薩としての寿命が	を明かす。ほとんど無限に等しい長遠な時間は、
』とされていたが、五百塵点却という、はるか昔の久遠に成仏していたこと【】	して初めて成仏した『』とされ
法華経迹門までは、釈尊が過去世に仏道修行を積み重ねた結果、その功徳の報いと	いよいよ、釈尊が
佐を具えているのである。〈第十五〉	されており、 と同じ仏としての境涯を具えているの
門)を割って、 (本地)へと涌き出てくる。彼らは久遠の昔から、釈尊に教化	る無数の【 の 】たちが大地(迹門)を割っ
(菩薩 · 菩薩 · 菩薩 · 菩薩 · 菩薩)を上首とす	
仏の滅後の弘教の許しを請う菩薩たちを釈尊が制止すると、	妙荘厳王本事品 第二十七
ると意得なければいけない――と仰せである。〈安楽行品第十四〉	陀羅尼品 第二十六
にわたる仏道修行を励めば、必ず難が起きてくる。このことが、実は安楽であ	観世音菩薩普門品 第二十五
] 法蓮華経を安楽に行ずるということは、末法において御本尊を信じ、自行化他	妙音菩薩品 第二十四
妙法蓮華経を修行するに難来るを以て安楽と意得可きなり」(御書750~)――妙	[二] 薬王菩薩本事品 第二十三 会
』で、「妙法蓮華経を安楽に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類い。	
続いて、摂受の修業として、身・口・意・誓願の四安楽行を説く。大聖人は『御	
	常第二十
やがて、悪世で法華経を弘通する者を迫害する【 】を恐れずに	法師功徳品 第十九
明かす。〈 第十二 〉	随喜功徳品 第十八
そして、 の成仏【 】と竜女の成仏【 】を	分別功徳品 第十七
ちへ弘教の決意を促すのである。〈第十一〉	如来第十六
が始まる。釈尊の滅後の弘教の難しさを【]をもって説き、菩薩た	(従地 第十五 会
の聴衆も仏の神通力によって、虚空に浮かび、	安楽行品 第十四
釈尊が宝塔の中で多宝如来と並んで座る()。	
来がを行う。十方の世界(全宇宙)から、一切の仏・菩薩が来集し、	第十二
七宝で飾られた巨大な宝塔が出現し、虚空(空中)に浮かび、宝塔中の多宝如] [見] 第十一 /

教学試験発心教材⑦ 教学講釈 〈一念三千〉 問 題

法梅蓮の

平成29年度 教学部初級試験·青年部教学試験3級 対応版

の十界の生命境涯の違いに応じて、住する国土・環境にも
をいい、このような五陰における十界の違いを「一世間」という。
基づいて思い孚かべたものを行為へと詰びつす、意志や欲求などのさまざまな心の乍用。「
を受け入れる知覚のはたらき。「「「陰」とは、」」とに、当命々を構成する報覧的作品。「
、上市本に構戈する勿質り則団。「 ̄_羹」によ、はないとされている。十界の衆生の違いは、その構
仏教では、この衆生の構成要素の意味として五陰を考え、あ
衆生はその生命境涯に十界の違いがある。これを「 世間 」という。 また、先の三千種の世間」の「世間」とは、差異・違いのことを意味し、十界それぞれの違いは、三つの次元に現れる。
・・・・これ以外の九つの如是が一貫性を保っている
4
・・・「因」に「縁」が結合(和合)して内面に生じた目に見えない結果 変
か ・・・外から「因」にはたらきかけ、結果へと導く補助的原因 Lu 」を具えた主体 る ̄ ̄ ̄ に
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
3 10 の項目
如是 ・ 如是 ・ 如是 ・ 如是 なり」(法華経100% ⁻)
是 如
- 縁に応じて仏界を現し、成仏できることを示しているのである。
これは、仏と九界の衆生がともに十界を具えており、本質的に平等であることを明かし、どのような生命の境涯にある衆生で
すのである。このように、十界の各々の生命に十界が具わっていることを、[
華経では、仏界を除く九界の衆生に仏界が具わっていることを説き、また逆に、仏に
界]・
法華経以外の経典では、十界(界]・[界]・[界]・[界]・[
(^)と仰せのように、十界互具はの中核の原理となる。
大聖人は、「
である。
足と三世間という、それぞれ異なった角度から生命とその因果の法則
とは、十界互具と十如是、そして三世間を合わせて総合したものである。
ずかでも我々の「一念の心」があるところ、「ののしている」
までのことであるが、たとえわずかでも心があるなら、そこに三千種の世間が具わるのである」(通解=御書9
には、すなわち三千種の世間が具わっている。この三千種の世間は、一念の心にある。もし心が
.る。それぞれの一界に、さらに十界が具わっているので、百界となる。そして、その一界.
聖人は「観心本尊抄」で、
をも可能にする」である。これは、池田先生の小説『人間革命』の主題である。
的こ表現してハるのが、「一人の人間こおける急的こ表現してハるのが、「一人の人間こおける急
7をも変えていけるという希望と変革の原理が <u>の法理である。</u> の法理である。
のわが生命に『無限の可能性』が秘められており、自身の一念が変われば自身を取り巻く環ー ペル゚ドド゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚
家・はたらきをいう。一念こ三千の者去が見つり、一念が三千の者去こ扁く広がることを覚ったのが「こここでしたものできてある。「一念」とは「まメーノーノの豚間豚間の母名のことである。「三円』とは「言え」でたれた「すべてのもののこと」あらぬる野
日蓮大聖人は、凡夫の身をもって、成仏のすがた・ふるまい(仏の境地)を、
る要因を具えているということを説いて、万人成仏の理論性を明かしたのがの法門である。
法華経に説かれている一切衆生のの原理を、中国のが、『』の中で、万人が本来的に成仏す
次の文中の

法梅蓮の 教学試験発心教材® 教学講釈二 〈御本尊の相貌〉 問 題

平成29年度 教学部初級試験:青年部教学試験の級 対応版

す文中の	まない)
はしますなり」(御書1244~)と日道大聖人は一出の後本尊今	こ、仰せである。全く余所に求る事なかれて兄弟れ等衆生の	> 注華縚を挟ちて南無妙法選華縚と唱うる脳中	中の肉団にも
あらゆる仏を仏たらしめてい	る根源の法そのものを、	であると明かされ、この根源の法と一	体となった大
聖人御自身の御生命を、	に顕された		
我々は、この	のを信受することで、	が自らの生命にを涌	現することができると
可度も可度も生でを操り返していうのが、大聖人の成仏観であ	ム道多亍を亍ハ、 ̄ ̄ ̄ ゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゚゚゙゙゙゙゙゚゚゚゙゚゚゙゙゙゙゙゙̄	竟重を兑して厶の竟重こ到達されなハコ、 ̄ ゚̄と説いていても、二乗(̄ ̄ ゚̄・ ̄ ̄)・ ̄ ゚̄)・ ̄)・悪人・女人や、
できないとされていたので	 	・「一つは、これの法理が明かされ	てい
、 と仏界は	いものとされていたので		
対して、法華経では	が示されることにより、		ことではなく、
の身に『しい』の	\triangle		
、比り大事を尽皿団人は「御義口伝」にお	四十余年の墹懖密 しこうのより今圣の寺苑を出て、「我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎	り大事を说いしが為こ仏は経なり此の五尺の身妙	は出世ン法蓮華経
う我等が一身の妙法五字なりと写なり、此のけ事を釈述女系	りと開仏知見する時・即身成仏するなり」(同716~)とも、仰せ羽・四十分年の間陽密したせジゲターム 糸の町記き出したせジカム	である。の力事を記かみかえに仏	だ 日 世
			į
また、「日蓮が」	にそめながして・	/ ~	なり日蓮が
	につきたるになり、同つ	いたられている	
界)を頂きてこものなのである。 御本尊は、根源の妙法である	。	て、開き顕し、体得された大聖人の仏	の生命境涯(仏
7 0 7 の	を、大聖人は、法華経の		
は、多宝如来の	虚空に浮	ا ا	第一
十二までにわたる。その核心は	は、 の であるという本地を明か	した釈尊が、久遠の弟子である	のを呼
び出し、自身の滅後の悪世に	を広めて人々を救い導くことを	くことを託すこと ()である。 これは、 ()	第十五か
第二十二までの	八品に説れており、	この___の儀式を模し	て表現されて
である。大聖	お手紙の中に、「竜樹	も 顕	二百余年の比
は宦荅の四方ことし・沢加・多宝・本とはじめて法華弘通のはたじるしとし	ピの四菩薩肩を並べ・・・・・・総じて顕し奉るなり、是全く日蓮が	「界八番の雑衆等一人ももれず、・・・・・・されば首題の五字は中央!	との卸本等のにかかり・天王
に住し給い妙法五	てらされて本有の尊形となる是を大	(同1243~)と仰せであるよう	御本尊
6	は虚空会の	における・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	B
薩などの の は	、本来的に私たちの生命に具わる	界や界を示したものである。	ると拝される。
のである。	や、その他の衆生も集っている。ゆ	えに、 には、十界の衆生の代表が	記されている
この	私たちの生命の十界・森羅万象が	欠けることなく円満に具わっておりく)、十界の
優れた特性が集まっている〈)ことを示してる。しかも、	の曼荼羅であるし、しは、	
法門の中核の原理である	の法理を、端的に示しており、	が「」で説き示した	
]
して、大聖人が	の御自身の身に開かれた仏の	境地を直ちに顕されたは、	を具体的に
のであるので、			
さらに、先の御文中の「法華弘通	のはた	は、「での儀式の意	いるのである。
我々が、大聖人御自身の身に開	き顕された妙法・仏界が御図]る妙法・仏界
を直ちに見ることになる、	のし、大聖人	人が万人に 界が具わるという	の経文上に
説かれた教えを深く掘り下げて	、ここに沈められていたことに	の根源の法そのものを直ちに説き示し、我々	が現実に成仏
するために実践できるよう、こ	具体的に確立されたものである。	は、凡夫の我々自身の界を現	を現実に映し出す
でもあるのである。			
	くことが、そのまま、	なわちのの道を開い	ていくことに
なるのである。			

法梅蓮の 教学試験発心教材⑨ 教学講釈三 〈妙法弘通の肝要〉 問 題

平成29年度 教学部初級試験:青年部教学試験3級 対応版

次の文中の

]にあてはまる言葉を答えなさい。

てその功徳を受け	ていく時、わが生命の妙法を現し仏の境涯を開い
妙法そのものであると信じてと唱え、他の人々に教え	我々は、 を手本・鏡として拝し、自身が妙法そのもの
御図顕された。	顕し、末法の人々が信じ受持すべきとして御図顕された
、根源の仏の生命境涯を の の の儀式を借りて曼荼羅に	
妙法そのものである』と覚知する智慧をもつとともに、妙法の無限の功徳	すなわち、"凡夫自身が、実は永遠にして根源的な妙法そのもの
とは、智慧を具え功徳の果法に満ちた仏の身のことである。	
〔性、人格の価値をそのまま発揮した仏である。「[自受用]の、自受	る。 の仏とは、生命それ自体が持つ尊厳性、人格の価
なる妙法を開き顕すことは、自身に の仏の境涯を顕すことであ	身の内
凡夫が妙法を自身の生命に開き顕す根源的な成仏の時を意味し、我々が	
久遠元初の自受用報身如来である。	であり、内心の覚りの境涯()においては、久遠元初の自呉
は、釈尊から付嘱を受けた、のの上前であるを菩薩	大聖人は、外面の姿やはたらき()においては、釈尊から
の として民衆救済の行動を貫かれたものと拝することができる。	
ハは、これら太陽・月と蓮華の役割を担う 菩薩 のはたらきを発揮さ	開き、実をならせる蓮華であると説いている。大聖人は、これらせ
という泥の中にあって、煩悩に煩わされることなく、清らかな覚りの	さらに 第十五では、世間という泥の
菩薩 ら	弘通を託された 菩薩
ීරි _ං	方こそ、 御自身であることは明確である。
1出現して、 を万人に説き、 で弘通された	でも 悪世 に出現し
466~)と仰せで	である。これを大聖人は、「
1493㎡)は、常にそして、永遠に人々を救っていきたいという慈悲の	させることができるかと念じている」(趣意=法華経493~)は、
に、どのようにすれば、衆生を無上の道に入らせ、速やかに仏の身を成就	法華経 第十六の最後に示された「仏は常に、どのよう
	を受けて、妙法流布を託したのである。
現しようとする、師弟不二の広宣流布のである。釈尊は、その	
て、成仏の肝要の法を、人々に教え広めることを___する。師匠であ	、成仏の肝
	のである(
第十五〉、釈尊の滅後の悪世の弘通を、 の へ託す	釈尊に教化されたのへと受け継がれ<
6って得られたさまざまな功徳による『仏としての境地』は、久遠の昔から	
6、仏種である「	よって得られたさまざまな功徳 ()のすべてが、仏種である
ており、釈尊が成仏するために積んだ膨大な修行	`
の二法は	さらに、同抄において、「釈尊のの二法は
ののによってなされる、即である。	によって行っていたが、日蓮仏法では、
44々自身に具わる十界をみることになる。これまでの成仏のための修行は、	を信じて拝すれば、我
法界を見る是を観心と云うなり」(御書240~)と仰せである。	観じて十
3。「観心本尊抄」には、「問うて曰く出処既に之を聞く観心の心如何、答え	本
は、という万人の生命の真実を表しているのである。	
覚知した根源の法であり、十界というさまざまな生命境涯のはたらきを生	は、あらゆる仏が成仏する時に覚知した根源
る。	してを唱えていくことを説かれるのである。
仏できる方法を探究され、 の を信じ、	そこで、大聖人は、どのような人でも実践し成仏できる方法
*修行のため、実際に覚りに到達する者は極めてまれであった。	能力と大変な努力が必要となり、現実は極めて困難な修行のため、
くつもの段階にわたる種々の修行を体系的に説くのだが、これには優れた	\mathcal{O}
.備していることを覚知するという、の法門でのの修	1
で、自己の心に十界が具わっていることを知り、さらにを理	\mathcal{O}
成仏するための修行とされていた。	想して自身の心を見つめていくという、「」が成仏するため
心を開いていく瞑想が行われ、とりわけ、経典に説かれた法理をもとに瞑	ための主たる仏道修行として、「定」
かれている。	この世に仏が出現する唯一最高の目的であると説かれ
兎涯)が本来的に具わっていることを明かし、一切衆生に仏知見を開かせる	本

法梅蓮の 教学試験発心教材⑩ 教学講釈四〈日顕宗を破す〉問 題

平成29年度 教学部初級試験·青年部教学試験3級 対応版

|--|